



# 西海区水産研究所 ニュース

No.104(2000年 冬季号)  
水産庁西海区水産研究所  
〒850-0951 長崎市国分町3番30号  
TEL(095)822-8158  
FAX(095)821-4494  
URL <http://www.snf.affrc.go.jp>



## クロフチススキペラ *Anampses melanurus* Bleeker

本種は、カンムリペラ亜科Corinae、ススキペラ属Anampsesに属する。本亜科魚類は側線が体後部で中断しない、背鰭棘数が8～9本、小型種で浅海性である等の特徴をもつ。また、本属は両顎にそれぞれ一對の前向き的大型歯を具えること、雌雄、成長による体色、斑紋に変化がみられるなどで他属と区別される。本種は同属のホクトペラA.meleagridesの雌に似るが、①尾鰭後部に黒色の幅広い横帯がある、②鰓耙数と側線鱗数が少ない、③尾鰭後縁が湾入していない等の特徴で識別される。

本標本(雌の成魚、若魚)は2000年5月に東シナ海南部(26°-06.72N;123°-46.05E)の水深134～143m、底層水温21.7～22.9℃の水域から水産庁委託事業のトロール調査によって得られたものである。これまで本種は千葉県～西表島、インド・太平洋の水深6-25mのサンゴ礁、岩礁域および転石域に分布するとされてきた。ところが、本標本は水深100mを超える貝殻混じりの砂底域から得られたもので、これまでの最深採集記録と考えられる。他種でもこのような事例がみられ、サンゴ礁や岩礁域に棲み、ガンガゼ類と共生するとされるヒカリイシモチ類が東シナ海の水深100mを超える海域からときおり採集されることがある。

これまで浅海性と考えられていた種類が比較的深い場所から採集されたことは生物の分布を考える上で興味深い。

以下に本標本の形態を記載する。

背鰭条数 12; 臀鰭条数 12; 胸鰭条数12; 腹鰭条数 5;  
側線鱗数 26; 鰓耙数 6+7-10, 標本番号 SNFR 01711、01713  
体長は頭長の2.8倍、体高の3.2-3.3倍、背鰭前長の2.8-3.0倍、臀鰭前長の1.6-1.7倍、尾部長の2.0-2.1倍。頭長は体高の1.1-1.2倍、吻長の3.0-3.2倍、眼径の5.0-5.7倍、上顎長の4.4倍、尾柄高の2.5-2.9倍、眼後長の2.0倍。

体色は黒褐色で9縦列の小白色点が並ぶ。鰓蓋後端には顕著な黒色眼状斑がある。背鰭には3縦列の青色(1列)と白色(2列)点が並ぶ。臀鰭には基底にそって1列の青色縦帯が走り、それと臀鰭縁辺間に3本の青色縦帯がある。尾鰭後部に幅広い黒色帯を持つ。

解説：山本圭介・堀川博史・越智洋介・山田梅芳 写真：山本圭介



## 目 次

表紙	クロフチススキペラ	1
巻頭言		
	ヤーヌスの半面が見てきたものへの想い	2
研究情報		
	UJNR サテライトシンポジウムの開催	4
	第9回国際サンゴ礁シンポジウムに参加して	7
	八重山産業まつり - 石垣支所 -	9
	西海区水産研究所を「せいかい」と読む理由	10
研究調整		
	第73回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ 長期漁況海況予報会議	12

	漁場生産力モデル開発基礎調査検討会	12
	海区水産業研究部会第3回魚介類分科会	12
情報の発信と交流		
	西海ブロック水産研究及び水産業情報	13
	所内談話会	18
	業績一覧	18
	人事異動	21
	西海水研日誌	21

巻頭言



## ヤーヌスの半面が見てきたものへの想い

嶋津 靖彦

英語でJanuaryというのは1月であるが、これはローマの神ヤーヌス（Janus）に由来している。この神は両面に顔をもち、前方と後方とを、過去と未来とを同時に見るができるという。20世紀も間もなく終ろうとしているこの時に、われわれは過去を振り返り、未来を見通して新しい世紀を迎えたいものと思う。

この百年間にヤーヌスの前面が見てきた無数の出来事は今となっては後面が見ている過去のものである。それらの中でも、われわれの生活を豊かにしてきた数多くの科学技術の開発は特筆されることだろう。それらによってわれわれは海に潜れるようにも、空を飛べるようになり、宇宙にも乗り出してきたが、戦争の道具として使われて人類に深い傷跡を残したり、未来にも暗雲が消えない技術もある。科学技術の世紀といわれた20世紀には、しかし、それらの技術を支える化石燃料への過度の依存によって、温暖化やオゾンホールなどの地球規模の環境問題が顕在化してきた。PCBやDDTなどの有機塩素化合物、ダイオキシンや環境中のホルモン様作用物質など、多くのツケを背負いながらわれわれは新たな世紀を迎えようとしている。配分の不均衡であるといわれる南北格差や食料危機などは解決できないままであるし、20世紀の人類活動の決算は科学技術の負の遺産の側面が強調されるような評価を受けることになるのだろうか。科学技術の発達とそれを使いこなすべき国家、社会、地域といった側のミスマッチが、こうした負の遺産を増幅させていることは明らかになってきている。

さて、この百年はまた、われわれにとって身近な国・都道府県における農林水産試験研究の世紀でもあった。国は農林水産試験研究の推進とその成果を通しての産業振興を企図し、農事試験場（1883）を初めとする国立試験研究機関を設置して、研究のための投資をおこなってきた。水産分野での国の試験研究は水産講習所（現在の東京水産大学）試験部の発足（1897）をもって始まりとし、この発展として農林省水産試験場が設置

（1929）され、戦後更に8海区水産研究所に分立（1949）されて今日の西海区水産研究所に至った。都道府県では愛知県水産試験場（1889）を皮切りに、国の奨励策を受けてその後の10年間で32道府県の試験場が設置された。九州・山口ブロックで最も早い福岡県では2年前に、山口県、長崎県、熊本県の3県では今年創立百周年を迎えた。しかし、行財政改革により、国による手厚い保護の体制は2001年3月をもって終わり、ほとんどの国立試験研究機関は独立行政法人として再出発することとなった。

西海水研の歴史は戦後の半世紀に過ぎない。以下本稿では設立当初から主要な研究対象としてきたところの東シナ海・黄海における底魚資源研究について、触れることとしたい。我が国の以西底びき網漁業の漁獲量は1951年の6万4千トンから1952年のマッカーサー・ラインの撤廃を経て、1961年には37万5千トン（以西トロールを含む）の頂点に達したが、1999年にはわずかに2万1千トンにまで低下した。現在は長崎県でわずかに2経営体14隻を残すのみである。昨年2月に印刷された「西海区水産研究所50年史」には、この歴史の生き証人とも言うべき諸先輩の体験や感慨が掲載されていて、心に染みるところが多い。

西海水研における底魚資源研究は1955年の日中間漁業協定調印、1965年の日韓漁業協定、1975年の日中漁業協定などの外交的エポックを迎えて一層の重要性を増したが、すでに業界は1960年代後半には収支均衡点の付近で徘徊していた。しかし、西海水研の研究者が黄海・東海における中国側の漁獲量の実態を知ることになったのは、更に後のことである。1960年には中国は270万トンと我が国の7倍以上もの漁獲を上げていたのであり、以西底びき網漁業の対象資源に決定的影響を与えていたのは、実は我が国の漁業ではなく中国の漁業であった。加えて韓国も1970年には我が国と匹敵する漁獲量を上げ、以降1980年代中ごろまでは我が国を引き離す

漁獲量の上昇を続けていたのであった。これらのことを明確に挙証する機会を得ずに、我が国の漁業データだけで自己完結的な分析を余儀なくされていたことは研究者として不幸なことであったという思いである（真道，1999。上記50年史）。

このような思いは以西底びき網漁業資源の研究者だけではない。戦後の外延的發展を遂げた我が国の遠洋漁業は1973年に漁獲量400万トン上げたが、米国の一方的な二百海里漁業水域の設定（1977）によって堰を切った大きな流れの中で衰退を余儀なくされた。この過程での米国の漁業資源戦略と一体となった漁業法の数次にわたる改正、海産哺乳動物保護法、行き過ぎた動物愛護運動などによって、我が国の母船式かに漁業を、母船式北洋底魚漁業を潰し、捕鯨業を中止させ、母船式さけ・ます流し網漁業を、あかいか流し網漁業を消滅させた歴史は明白である。これらに関連するさまざまな思いを持つ先輩諸氏も多い。中でも南方トロール漁業の資源研究に携わって、この漁業の栄枯盛衰を見届けた遠洋水研の先輩研究者が言ったことが忘れられない。「いったい、われわれは、誰のために、何のためにこの研究をしてきたのだろうか、という思いがある。今となつては、結果的に他国の海を耕し、財産目録を作っていたという空しさだけが残る。」と。

研究所の諸先輩のこのような思いは、われわれに取っても重く響くところがある。それは、この半世紀の我が国遠洋漁業の栄枯盛衰を不幸にして彼らもわれわれも見届けた、という事実を共有するからである。そうした中で科学者として真実を追究し、漁業資源の管理のための科学的根拠にもとづく助言を形成し、行政と産業とを支えてきた諸先輩とわれわれは、結果として今日の資源と漁業の姿を見ることになったからである。しかし、嘆いているばかりではない。以西底びき網漁業の資源研究の歴史を冷静に評価するならば、漁業対象魚種の分布、系群、生物特性（年齢、成長、成熟、生残率）などの研究成果は、それらが我が国の漁業と調査船の及ぶ範囲からの情報に限定されていたにせよ、決して色あせることのない事実なのである。漁船の漁獲物を統計理論にもとづ

いて厳密に徹底的に調査したこと、また、研究と業界が率先した形で取り組んだ網目拡大を実現させたことは、我が国漁業資源管理の歴史的成果であるといってもよい。漁業資源に対する漁獲圧を解析するための他国の情報が欠如していた、その一点が残念なところである。そしてこのことは資源研究に従事した研究所の諸先輩に責めを帰すべきものではなく、近隣の三か国の漁業で同じパイの資源を食い分けながら、その科学的管理のための枠組みの形成が不十分であったところに問題があった、ということを確認したい。多国間国際漁業条約における科学委員会の活動に携わってきた経験を持つ筆者は、そこが根源であったと思う。

遅かったと思うが、まだ遅過ぎはしないだろう。20世紀のうちに国連海洋法条約の発効、T A Cに基づく漁業管理の実践、日韓新漁業協定、日中新漁業協定の成立などの新たな展開があったことを幸いと受け止め、われわれ現役はこれらの新たな状況に対応した使命を果たすべく取り組んでいかなければならない。その際には関係国間の正確な情報の交換と研究者間の積極的な交流は必須の事項である。東海・黄海の底魚資源の現状は厳しい状況にあり、再建にはかなり時間がかかるだろうが、われわれは希望を捨てていない。

ヤーヌスの前面には果たしてどのような将来が見えているのだろうか？

（西海区水産研究所長）

（補記）東海・黄海における資源研究を通じて当所山田梅芳氏が長年にわたって収集してきた15,000個体、おそらく1,000種を超える標本については、京大中坊教授のご協力を得て逐次整理作業を進めており、やがて価値あるものとして再生する計画である。また、遠洋水研の遠洋底魚資源研究では開洋丸や用船による新漁場開発調査で漁獲した多数の標本を保存してきたが、2度と得られないこれらの貴重な標本は、国立科学博物館において学術的に活用されるために逐次引き渡している。こうした貴重な財産がそれぞれに活用できる状態に整備されることを期待している。

研究情報

## UJNR サテライトシンポジウムの開催

佐藤 良三

西海区水産研究所石垣支所竣工記念事業の一環として、UJNR（天然資源の開発利用に関する日米会議）水産増養殖専門部会の第29回日米合同会議サテライトシンポジウムが、平成12年11月14日に「亜熱帯域における環境保全型増養殖研究の現状と展望」の課題で、沖縄県石垣市の大濱泉信記念館で開催された。このシンポジウムは、亜熱帯域の増養殖技術に関する研究の集約及び石垣支所における研究成果のPRの目的で企画され、アメリカから19名、フィリピンから2名、オーストラリアから1名の参加があり、我が国からの参加者を合わせて69名で盛大に行われた（写真1）。

石垣の11月の天候は安定せず、今回のシンポジウム開催において天候が一番懸念されていた。案の定、参加者がホテルへ到着した直後から大雨の歓迎を受けた。ちなみに、石垣島川平では1時間に125mmの記録的な雨と報道されている。

13日には天候が回復し、八重山漁協魚市場、琉球真珠株式会社、沖縄県水産試験場八重山支場、西海区水産

研究所石垣支所、日本栽培漁業協会八重山事業場の見学及び川平湾でのグラスボートによるサンゴ礁の観察が組み込まれた石垣島現地検討会が催された。シンポジウム終了後の15日にも、西表島仲間川マングローブ生態系視察（写真2）、西表野生物保護センター及び星砂の浜見学の西表島現地検討会或いはサンゴ生態系のスノーケリング観察による白保サンゴ礁観察現地検討会が行われた。それぞれの現地検討会への参加者は石垣島や西表島の豊かな自然を十分堪能されたのではないかと思う。

14日のシンポジウム（写真3）では、亜熱帯域における沿岸資源生物、資源培養、養殖など、これまで研究蓄積の少なかった亜熱帯域増養殖技術に関する最近の研究紹介と環境保全型増養殖に向けた展望（招待講演4題、一般講演4題）について発表があった。中でも、環境を考慮した完全閉鎖系養殖システムは今後の養殖の方向性を示す非常に興味深い発表であり、垂下式生簀におけるナンヨウアゴナシの養殖試験の生産性の高さには目を見張った。その他、サンゴ礁・マングローブ域などの養殖、



写真1 午前のシンポジウム終了後の参加者一同



写真2 西表島仲間川のマンングローブ観察

写真3 シンポジウムでの発表  
(F. カーン; NOAA, 国立海洋センター)

栽培漁業などの発表だけに対してではなく、放流効果、移植による魚病の問題、資源培養の定義、漁業協同組合の役割など盛りだくさんの項目についての論議が交わされた。また、沖縄県水産試験場、日本栽培漁業協会、琉球大学、東海大学及び当所からのポスター発表では熱心な質疑応答があり大好評であった（プログラム参照）。

シンポジウム終了後のレセプションは大濱信泉記念館近くの石垣グランドホテルで開催され、大濱石垣市長にもご列席いただき、乾杯の音頭を取っていただいた。レセプションには50名が参加し、参加者は研究の情報交換やシンポジウムで言い足りなかった論議に花を咲かせ、旧交を暖めたり、終始和やかな雰囲気の中に終了した。

シンポジウムでは忌憚のない論議が交わされ、現地検討会では我々が意図した自然観察や各機関の見学を十分に満足していただき、目的が十分に達成されたものと言えよう。また、シンポジウムの参加者に対し、一般講演、ポスター発表、石垣支所の施設見学及び研究成果集などのPRにより、石垣支所の研究活動を十分にアピールできたと思う。主催者側の一人として、アメリカ、フィリピン及びオーストラリアの遠方や、国内から参加していただいた大勢の方々に対して感謝の意を表したい。さらに、シンポジウム開催に際し多大な支援をいただいた水産庁及びUJNR事務局の養殖研究所の方々へ感謝の意を表します。

(石垣支所長)

## プログラム

### 挨拶

1. 嶋津靖彦（西海水研所長）
2. R. エピー（NOAA）
3. C. マンケン（北西水産科学センター）

### 一般講演

[座長：D. R. ヒューイト・阿部和雄]

1. 石垣支所における増養殖研究：現状と方向：皆川 恵（西水研石垣）
2. 日本亜熱帯域の沿岸資源生物の多様性：栗原健夫・加藤雅也（西水研石垣）・小林正裕（水産庁）・水戸啓一（北水研）

[座長：R. プレイロック・加藤雅也]

3. ハワイ沖合での垂下式生簀におけるナンヨウアゴナシ（ツバメコノシロ科）の養殖試験：C. ヘルスリー（ハワイ大学；アメリカ）
4. 疾病、害虫、捕食生物の移入とそれらが漁業ならびに養殖に及ぼす影響：F. カーン（NOAA, 国立海洋センター, アメリカ）

### 招待講演

[座長：C. ヘルスリー・小菅丈治]

1. オーストラリアにおける環境保全型養殖：現状と将来方向：D. ヒューイト（ブリービー養殖研究センター：オーストラリア）
2. アジアにおけるマンングローブに優しい養殖：J.

プリマベラ（養殖部局，東南アジア漁業開発センター：フィリピン）

[座長：F.G.カーン・輿石裕一]

3. アメリカの亜熱帯，熱帯地域における資源培養の現状と概要：K. レーバー（モート海洋研究所，アメリカ）
4. サンゴ礁海域における栽培漁業の現状と将来：村越正慶（沖縄栽漁セ）

総合討論（座長：K. レーバー・村井武四）

ポスター発表

1. 琉球列島におけるスイショウガイ科クモガイの養殖と個体群動態：上野信平・毛利詩乃（東海大海洋）・梶原健次・宮平和法（平良市栽セ）・濱口恵一（東海大海洋）
2. 体内に自家果樹園を持つサンゴ礁域の自給自足者・・・シャコガイ：岩井憲司・玉城信（沖縄水試八重山）・村越正慶（沖縄栽漁セ）
3. ふ化イカ放流によるコブシメ資源増殖の試み：山下貴志・浜崎活幸・與世田兼三（日裁協八重山）
4. 沖縄におけるシラヒゲウニの栽培漁業：渡辺利明（沖縄水試）・大城信弘（沖縄栽漁セ）
5. 石垣島の礁池におけるクロナマコ個体群の生態：西濱士郎（西水研石垣）・水戸啓一（北水研）
6. セディメンテーションがハナヤサイサンゴの遺伝子発現に与える影響：橋本和正（西水研石垣）・萱野英子（東大工）・萱野暁明（農水

省）・澁野拓郎・阿部 寧・高田宜武（西水研石垣）

7. サンゴ幼生の放流によるサンゴ礁の修復：そのコンセプトと予備的研究：林原毅（西水研石垣）・岩尾研二（阿嘉島臨海研）・皆川恵（西水研石垣）
8. マレーシアマングローブ汽水域における底魚類の生態：木曾克裕（西水研石垣）・マヤム M. I. ムハマッドファディル F.（水産研究所；マレーシア）
9. 日本および台湾のウナギの遺伝的集団構造：加藤雅也（西水研石垣）・小林正裕（水産庁）・栗原健夫（西水研石垣）・水戸啓一（北水研）
10. 藻食性魚類による採食が大型褐藻の藻場に及ぼす影響：清本節夫・吉村拓（西水研）
11. 体表粘液に見いだされる雌特異タンパク（ピテロジェニン）を利用したカンパチとキハダの雌の選別：竹村明洋（琉球大熱帯生物研瀬底）・兼松正衛・岡 雅一・塩澤聡・照屋和久・竹内宏行（日裁協八重山）
12. 飼育キハダの骨格異常：清水弘文（西水研石垣）・塩澤 聡（日裁協八重山）
13. 日本栽培漁業協会におけるクロマグロ種苗生産の現状：手塚信弘・升間主計・神保忠雄・小磯雅彦・鶴巻克己（日裁協奄美）・難波憲二（広島大）

## 第9回国際サンゴ礁シンポジウムに参加して

\* 澁野 拓郎 ・ \*\* 林原 毅

石垣支所から我々と橋本研究員の3名が、10月23日 - 27日の5日間、インドネシアのバリ島で開かれた第9回国際サンゴ礁シンポジウムに参加し、サンゴに関する課題2題と魚類に関する課題1題についてポスター発表を行った。インドネシアといえば、サンゴ礁で仕事をしている者として一度は行ってみたいサンゴ礁生物の分布の中心地である。まして、観光地として有名なバリ島ときてはもうこれ以上のお膳立てはない。いくら「仕事で行くのだから」と皆に言ってみても顔のゆるみは隠せなかった。

シンポジウムの内容に関しては澁野が担当するので、話が魚に偏ってしまうがお許し願いたい。この国際サンゴ礁シンポジウムは4年に1度開かれるサンゴ礁で研究する者の同窓会のような雰囲気があり、世界中から大御所の先生方が大勢集まっていた。今回約1,200人とも言われた参加者の内訳は、自国に大サンゴ礁を持ち距離的にもバリに近いオーストラリアからの研究者が圧倒的に多く、特に若い学生の姿が目立った。この他にも、自分の裏庭にサンゴ礁があるようなアメリカ、フランス、サンゴ礁の衰退を深刻な問題としてとらえているフィリピンからの参加者が多かった。自国にサンゴ礁を持つ日本からの参加者は100名足らずと少なく、中でも魚類研究者が数名しかいなかったのは寂しい限りであった。

初日の夕方に設定された私たちのポスター発表では約350題の発表があったが、割り当てられた時間は1時間半と短く、狭い会場には人があふれ、とても全部をゆっくり見て回れるような状態ではなかった。しかし、同じ

ような内容の発表は比較的近い場所にまとめて配置されていたので、インド洋、フィリピン近海、マーシャル諸島におけるサンゴ礁生態系の攪乱と生物相の関係やサンゴの保全に関して情報交換を行えた。

口頭発表は、サンゴの生理・生態やサンゴ礁保全等に関して全部で14の会場に分かれて連日行われたが、その中から私が聞いた魚類生態関連のセッションから少し紹介する。「稚仔魚の生態」に関するセッションでは、カナダのSale、アメリカのWarnerらがここ30年近く議論の対象となっている磯魚個体群の群集構造を決めるもとなる稚魚の分散、加入の問題について、浮遊性幼稚魚の分散のスケールに焦点を当てて取り上げていた（幼稚魚の分散加入はopenかcloseか?）。その後の発表でも、これらの問題に生態学的、生理学的、海洋物理学的な側面からアプローチしたものが多かった。その他、「サンゴ礁魚類の生活史と繁殖」、「サンゴ礁魚類の群集構造」、「サンゴ礁魚類の保全」に関するセッションでは、着定時の稚魚の生理状態と生残の関係、沖合と岸近くでの着定パターンの比較、現在の性転換理論に対する疑問、魚類のモニタリング手法、サンゴ礁魚類の分布とマングローブ・藻場の利用の仕方などが論議された。群集構造に関してはなぜかチョウチョウオ類の話が多く、インドネシア・紅海・グレートバリアーリーフ・ペルシャ湾各地のチョウチョウオ類の分布様式について知ることが出来た。また、毎夕、特別集會が組まれ、私は九州大学の中園先生に誘われて香港大学のSadovy女史が主催するIUCNのハタ科・ベラ科魚類専門家グループの集會



におじゃました。ここでは約20名ほどの参加者が、ハタ類や大型ベラ類の資源保護のための情報交換を行っていた。後でSadovy女史から日本のサンゴ礁域の漁業について聞かれたが、私たちが沖縄県の漁獲統計資料から簡単に手に入れることが出来る情報がお隣の香港では全く知ることが出来ないことには驚いた。

さて、バリ島では島の東側のパダンバイとペニダ島で潜った。パダンバイでは土地の漁師が使うジユクンというアウトリガーの小さな船に乗ってポイントまで移動した(写真)。ここでは漁師は潜って魚を捕らずに、もっぱらこの船で沖まで行って一本釣りをするらしい。そのためか、ここの魚は大きくのんびりしていて逃げなかった。前の週に雨が降った影響で透視度は良くなかったが、熱帯の中心地だけあって石垣島でもおなじみの種も含めて魚の種類は豊富だった。ペニダ島にはバリを離れる日に行ったためスノーケリングしかできなかったが、潮通しのいいリーフエッジで群れるスズメダイ類、テングハギ類をみて堪能した。帰りに隣のレンボンガン島に上陸する機会があった。島の高級リゾートホテルの隣にある小さな村では、目の前のリーフで海藻(キリンサイの仲間)の養殖をしており、化粧品に入れる原料として日本にも輸出されているとのことだった(写真)。

最後に、我が国のサンゴ礁研究者の懸案となっていた国際サンゴ礁シンポジウムの日本誘致について林原が報告する。次回、2004年のシンポジウムは沖縄で開催されるのが最終日のクロージングセレモニーで正式に発表された。会場としては宜野湾市の沖縄コンベンションセンターが予定されており、この石垣島も巡検の候補地の1つに確実視されている。沖縄で立候補した背景には、サミットを契機に沖縄での国際会議開催を積極的に進めるという閣議決定もあり、関係機関の支援を大いに当てにしていることである。

これまでの経緯を簡単に述べると、話は4年前のパナマでのシンポジウムにまでさかのぼる。パナマでの2000年開催地の誘致活動は今回以上の熱気を見せており、日本人参加者は驚き圧倒された。しかし、この誘致合戦を横目にみながら会場の一角で日本人参加者の一部により行われた非公式会合が基礎となって、その後の日本サンゴ礁学会の設立(1997年)、国際サンゴ礁会議招致準備小委員会(1999年)および同誘致委員(2000年4月)の発足等の準備が着実に進められてきたのである。当時も含めて、日本が開催地として立候補することについて、国際サンゴ礁学会のコアメンバーからは非公式な



打診が過去に数回あったと聞いている。年々規模が大きくなっているシンポジウムの開催には経済的な負担も大きく、自国にサンゴ礁を有する先進国として、また学会員数でも、アメリカ、オーストラリアに次ぐ第3位である日本に、サンゴ礁研究の発展に責任を果たしてほしいということが背景にあったものと考えられる。今回、最終的な候補地としては、沖縄の他にパハマとキュラソーが残ったが、サンゴ礁学会を立ち上げ、研究者が主体的に誘致に取り組んでいることが評価され、日本での開催が決まったそうである(写真)。

サンゴ礁学会というとサンゴ研究者のマニアックな集まりのような印象を持つ人が多いのか、前述のように、我が国の場合には魚類や水産の関係者が極端に少ない現状がある。しかし、国際サンゴ礁シンポジウムでは、サンゴ礁の持続的な利用や保全のための政策など、国家レベルで議論するようなテーマが多く取り上げられているのである。4年後の沖縄での開催に向けて課題は多いが(確かに、資金集めは最重要課題である)、今回のシンポジウム以降、世界的なサンゴ礁研究者のメールリストでは、次回のシンポに何を望むかという問いかけに議論が沸騰しており、日本に対して大きな期待がかけられている。その中身は、主にプログラム編成の改善やプロシーディングスの電子化といった次元ではあるが、それ以上に望まれ注視されているのは、自国にサンゴ礁を有する先進国として、途上国に対して手本となる活動や研究が示せるか、という点であると思われる。

\* 石垣支所亜熱帯生態系研究室

\* \* 石垣支所資源増殖研究室

## 八重山産業まつり - 石垣支所 -

岡 慎一郎

去る11月4日と5日の両日、石垣島では「第23回八重山産業まつり」が開催された。このまつりは、八重山地方の地場産業の発展と特産品の普及等を目的としたものである。例年のとおり我が石垣支所も、広報活動の一環としてパネルや標本の展示、パンフレットの配布等を行った。本年度はミレニアムイヤーにあたり、今世紀最後の産業まつりということもあって主催者の意気込みも大きく、小さな島の一大ビッグイベントを反映してか、客の出足も好調であった。石垣支所の展示を行った水産コーナーを訪れた方も、例年の1,000人前後を大きく上回り、のべ3,000人を越えるに至った。本年度は主催者側の都合で水産コーナーの展示範囲が例年の半分に縮小されたが、それにもかかわらず大勢の方々にお越し頂いたのは、海の生き物や水産業の発展、公的な研究機関の業務内容等に興味を持つ方が増えつつあることを意味しているのではないだろうか。もちろん配布物（うちわやマグネット）目当てだけの人や雨宿りのついでに立ち

寄っただけの人も見受けられたが、それらの方を除いても、水産コーナーの人気は年々高まりつつあるようである。この「まつりの中の展示」は、これまで興味はあってもなかなか質問する機会に恵まれなかった市民の方々が、まつりという和やかな雰囲気の中で、気軽に研究者と話が出来る機会にもなっているようである。われわれも出来る限り難しい専門用語を使わずに、質問者の年齢や興味にあわせて身近な話題などを踏まえながら、わかりやすく答えるように心掛けた次第である。

また石垣支所は平成11年3月末に竣工し、本年度7月には初めての一般公開を行った。市民に開かれた研究所の第一歩を踏み出したわけである。今回の八重山産業まつりにおける市民の関心の高まりを見ても、石垣支所は亜熱帯の地域に根ざした「ばがー島の研究所（“我が島の研究所”の意）」として受け入れられつつあるようで、喜びと責任を感じた2日間であった。

（石垣支所 岡 慎一郎）



## 西海区水産研究所を「せいかい」と読む理由

嶋津 靖彦

昭和41年に東海区水産研究所に入所して以来、筆者は西海区水産研究所を「せいかい」と読むことに何の抵抗も感じたことはなかった。ところが、平成12年4月に長崎に着任して以来、どこを見ても「西海」は「さいかい」である。剥離石器での西海技法、西海新聞、西海学園、西海国立公園、西海橋、西海町、その他長崎市の電話帳をみても「せいかい」と読む例はこの研究所以外に見あたらない。「せいかい」という読み方に次第に違和感を感じるようになった。なぜ「せいかい」なのか？

当所の大先輩である真道重明、伊東祐方、大滝英夫氏にうかがっても、彼らの若かりしころにもすでに同様の疑問があったが、真実は確認できていないとの回答である。昭和29年に第1号を発行した研究所報告ではSEIKAI REGIONAL FISHERIES RESEARCH LABORATORYとなっている。藤谷 超氏によれば、この機会に「せいかい」に統一したのではないかと、それまでは西海水研の人たちも「せいかい」、「さいかい」と様々に呼んでいたように記憶しているが、とのこと。「さいかい」は長崎地方の方言ではないかと、とも。

しかし、戦前からの農林省水産試験場が農林省設置法を改正して24年6月に8海区水産研究所として再発足したときには、すでに「せいかい」であったことはまちがいない。25年3月に水産庁調査研究部研究第一課長から初代所長として赴任された伊藤 憊(たけし)氏は必ずやこの経緯をご承知であったはずであるが、37年3月までお勤めになった同所長に読み方のいわれを直接確認したとの情報は、今までのところ得られていない。

役所的に言えば正式名称は「西海区水産研究所」であって、これを「せいかい」と読むのか「さいかい」と読むのかについて、公的な決まりはないというのが正解のようである。ただし、法律は別で、「遡河性(そかせい)魚類」を慣用で「さっかせい」と過去に読んだことが今日も正式名称になっている例がある。研究所の英名は水産庁漁政課を経由して大臣官房の広報に参考までに通知することがあると承知しているが、これは関係者の業務の利便にという性格のものである。漢字の西の音は、

「セイ」が漢音、「サイ」が呉音であるが、西湖、西施、西洋、西遊(西洋に旅行すること)など軒並みに「セイ」であり、わずかに西方浄土、西遊記、富士五湖の西湖、五畿七道のうちの西海道などが「サイ」の例である。

戦後8海区水産研究所への分立の経緯について、「農林行政史」(第8巻)には次のように記している。「昭和22年12月、総司令部天然資源局長から、農林大臣に対して、水産業調査研究機構の改革が要請された。これによって、農林大臣は左記9名の委員を選定して、これが研究方を委嘱した(委員氏名列記)。前記委員は、数回の委員会を開催して研究を重ね、23年5月5日、農林大臣永江一夫宛に、水産業調査機構改革に関する件を答申した。(以下略)」。この答申の第2項として、「実施機関として8区水産研究所を設置すること(別図添付)」が盛り込まれており、別図での「西海」の受持海区は熊本県から鳥取県となっている。関連する別の資料には委員会の第1回会合に先立ってGHQヘリントン氏のスピーチが記録されており、同氏は委員会にもしばしば出席したとされているので、この際にはSeikai・・・と読まれたのではないかと想像される。

当時のこの委員会の委員でご存命の方は近藤康男先生ただお一人となってしまっていて、百歳を超えた先生に経緯を照会するお手紙を差し上げたが、ご返事はいただけない。そこで、九大名誉教授の塚原 博先生に同様趣旨のお手紙を差し上げてお尋ねしたところ、お答えをいただくことができた。先生は当時から九州大学にお勤めなさっていて、藤永元作研究部長の相談相手でもあった相川教授(藤永元作氏の後を受けて、34年10月~37年1月に水産庁研究部長をお勤めになった)からいろいろと事情を伺っていたとのことである。塚原先生は伊藤所長ともご懇意であったが、この件に関しては直接お伺いしたことはない、しかし、次のように承知しているとのこと説明である。

九州地域に国立の水産研究所が設置されるについて地元での誘致合戦が盛んに行われ、中でも以西底びき網漁業の根拠地であった山口県、福岡県、長崎県がそれぞれ

に熱心であった。結局は23年6月に農林省水産試験場長崎臨時試験地が設置されていたことがベースとなつて、24年6月に長崎市に西海水研を設置することとなった。その後25年には福岡、下関、浜（佐賀県）の臨時試験地が逐次設置された。西海水研をめぐる上記3県の誘致合戦はかなり熱したものであったようだ。「さいかい」という読み方は（北部）九州地域に固有のものという通念であり、一方、この研究所の所掌する範囲は更に広く黄海・東シナ海域における以西底びき網漁業をも抱えているところから、東海区、南海区に対応する西海区（さいかいく）としたのだと聞き及んでいる - - とのことである。

農林省設置法の改正の準備過程で、西海区の読み方を水産庁漁政課が決めたことは容易に想像できるが、ある意味でこれは誘致に熱心であった山口県に対する行政的

配慮の産物であるとも取れる。伊藤所長が敢えてこの経緯を語ることがなかったとすれば、あるいはこのような行政的判断があったためなのかも知れない。以西底びき網漁業の主要な根拠地の一つであった山口県の思いは、25年4月の下関試験地の設置とその後の下関支所への格上げ（41年）によって果たされたのであろう。

西海区の読み方が行政的な配慮の結果という一方の根拠はやや意外な感じであるとしても、「さいかい」が「さいかい」よりも広い海域を指すという他方の根拠は、筆者が想定した正解の一つに入っていた。西海水研の創立から半世紀を経て、このことを直接に確認する相手はもはやいないというのは残念なことではあるが、半世紀振りの回答として、ここに記録する次第である。

（西海区水産研究所長）

## ニュース102号記事の訂正

ニュース102号の記事「あの木何の木」の末尾で、魚のアコウの種小名 *matsubarae* は松原喜代松博士に由来していると書きましたが、その後、松原新之助先生の誤りであったことが分かりましたので、謹んで訂正します。資料を提供いただいた永澤さん（日水研）に感謝します。ドイツの博物学者 Hirgendorf 博士は1873年から4年近くにわたり東京医学校（現東京大学医学部）の教師として来日し、数学と博物学を教授しました。博士は我が国の計36魚種の新種を発表していますが、滞在中に起居を共にして博士を助けた松原新之助氏に対してアコウの種小名を献呈したのです。松原新之助先生は後に水産講習所（現東京水産大学）の初代所長（1903～11年）をなさった方です。

（嶋津）

**研究調整**

**第73回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁況海況予報会議**

平成12年10月17・18日の2日間、那覇市(自治会館)において、13機関40名が参加し標記会議が開催された。

各県水産試験研究機関、漁業情報サービスセンター、中央水研、西海水研の担当者が、東シナ海および九州南部～日本海西部における漁況海況の現況を分析し、平成12年度後期の予報を作成した。また、鹿児島大学名誉教授の柿沼好子先生をお招きしてクラゲの生物学について講演していただいた他、漁況海況に関する4題の調査・研究発表があった。

**特別講演**

クラゲの生物学

柿沼好子(鹿児島大学名誉教授)

**調査・研究発表**

薩南海域における海流特性の一考察

西野博(鹿児島県水産試験場)

種子田雄(西海水研)

筑前海におけるゴミの大量発生について

吉田幹英(福岡県水産海洋技術センター)

長崎県におけるマアジの漁況予測

水田浩二(長崎県総合水産試験場)

ニューラルネットワークを用いたマアジの漁況予測

板坂信明(鹿児島県水産試験場)

作成した予報文は「対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁況海況予報(速報)」として10月19日に関係機関に送られ、平成12年中に印刷される本会議議事録に収録される。また、特別講演と調査・研究発表の内容は、平成13年度に発行される「西海ブロック漁海況調査研究報告第9号」で報告される。

準備・運営に関する沖縄県の全面的なご協力により、本会議を無事開催し、予報文を作成することができた。第74回会議は平成13年3月に長崎市で、第75回は平成13年秋に佐賀県で開催される予定である。

(東シナ海漁業資源部長記)

**漁場生産力モデル開発基礎調査検討会**

平成12年12月25、26日の2日間、当所において、6機関19名が参加し標記会議が開催された。

本調査は福岡、長崎、鹿児島県と西海水研との共同研

究として平成8年度に開始されたもので、今年度が最終年度であり、今回は最後の担当者会議であった。①8～11年度までのデータ解析と今年度調査の進捗状況、②単年度報告書のとりまとめ及びブロック内調査データの集約状況、③今年度調査指針の確認、④漁業情報サービスセンターによるデータベース作成作業の進捗状況等について報告と討議が行われ、モデルを含む最終報告書の取りまとめ方針と作業スケジュールが確認された。

(海区産業研究室長 記)

**海区水産業研究部会第3回魚介類分科会**

平成12年12月13、14日の2日間当所において16機関44名の参加により標記会議が開催された。

栽培資源のモニタリング調査及び放流海域・成育場の環境保全をテーマに下記の話題が提供され、これらの課題への対応には県の壁を越えた協力が重要との認識で一致した。また、協力体制の確立に向け担当者間の情報連絡を密にすることを決めた。この他、栽培資源や地域資源の管理に関する課題を中心に情報及び意見の交換が行われた。

**話題提供**

1) 幼稚魚資源量調査(栽培資源の漁期前モニタリング)の重要性

奥石裕一(西海水研)

2) フグ類資源の動向と今後の展望

天野千絵(山水研セ)

3) 鹿児島湾内におけるヒラメ放流効果調査について

厚地 伸(鹿児島水試)

4) 熊本県におけるマダイ・ヒラメの放流効果とモニタリング体制について

中尾 和浩(熊本水研)

5) 魚類の食害が疑われるヒジキの生育不良

桐山 隆哉(長崎水試)

6) シラヒゲウニの資源回復を目指して

渡辺 利明(沖縄水試)

7) 佐賀県玄海町地先三ツ瀬に放流したアワビ種苗の追跡調査結果の概要

鷲尾 真佐人(佐賀玄セ)

8) 筑前海におけるクロアワビの放流効果と資源変動

太刀山 透(福岡水海技セ)

9) マナマコの種苗放流効果調査の現状について

真崎 邦彦(佐賀養セ)

10) 潮止め後の諫早湾口周辺海域における底生動物生息密度の減少について

東 幹夫(長崎大学)

(資源培養研究室長 記)

# 西海ブロック水産研究及び水産業情報（西海水研分）

No.31 平成13年1月（平成12年10月～12月分）

西海区水産研究所

情報の発信と交流

関係会議等				
<p>*平成12年度西海ブロック水産関係試験研究推進会議 第73回対馬暖流系漁況海況予報会議（10月17～18日，那覇市，参加13機関39名，西海水研主催）                  柿沼好子鹿児島大学名誉教授を招聘して「クラゲの生物学」の特別講演を頂いた。クラゲの生活史、生態から海洋生態系の中での役割など長時間にわたっての講演は有意義であった。これまで漁業資源生物に係わりの少ないクラゲは水産研究の中ではあまり取り扱われてこなかったが、今後漁業資源を包括する生態系の構成者として注目していく必要がある。                  *平成12年度西海ブロック水産関係試験研究推進会議 亜熱帯水産業研究部会（11月30日，石垣市，参加7機関28名，西海水研主催）                  「マグロ類の生態研究及びバヤオ漁業について」の4課題で発表があり，熱心な議論が行われるとともに再捕等の連携協力が要請された。また，ヒレナシジャコの増殖，浮魚礁による漁場造成，シラヒゲウニの放流，ホルマリン標本のDNA分析等のトピック的な研究紹介があった。オブザーバー参加の栽培関係機関から，栽培に関連したテーマも取り上げるよう要望が出された。今後，栽培関係場所も正式なメンバーに加わるように要請し，テーマ，開催時期及び場所について調整することとした。                  *平成12年度西海ブロック水産関係試験研究推進会議 海区水産業研究部会・魚介類分科会（12月13～14日，長崎市，参加17機関44名，西海水研主催）                  関係14機関から魚介類を対象とした今年度の調査・研結果及び来年度の計画が報告された。また，栽培資源の管理や成育場の保全を主体とした10題の話題提供と意見交換が行われ，予算確保が困難な中で資源状態のモニタリングの継続及び成育場保全の必要性について共通の理解が得られた。</p>		<p>*UJNR（天然資源の開発利用に関する日米会議）第29回水産増養殖専門部会日米合同会議サテライトシンポジウム（11月13～15日，石垣市，米國・フィリピン・オーストラリアから22名，合計69名，西海水研主催）                  石垣支所の竣工を記念し，「亜熱帯域における環境保全型増養殖研究の現状と展望」のテーマで開催した。シンポジウムでは，亜熱帯域における沿岸資源生物，資源培養，養殖等の亜熱帯域増養殖技術に関する最近の研究及び環境保全型増養殖の現状と展望について発表及び論議がなされた。石垣島，西表島現地検討会等では，調査・研究機関の見学及びサンゴ礁・マングローブ域等の自然観察を行った。                  *資源管理研修会（12月5日～6日，長崎市，参加7機関15名，西海水研主催）                  水産庁平成12年度資源評価確立推進事業の一環として開催した。研修内容は資源評価及び管理に関する講義および演習である。また，東京水産大学の桜本和美氏による特別講義「モデルの作り方とパラメータの推定方法」が行われた。演習ではパソコンを使用し，練習問題を実際に解くことにより講義の理解が深められたものと思われる。                  *平成12年度第2回漁場生産力モデル開発基礎調査検討会（12月25～26日，長崎市，参加6機関19名，西海水研主催）                  関係4機関から今年度の調査結果とこれまでに得られたデータ解析の進捗状況などが報告された。また，鍵種，競合種，捕食種などの漁獲情報も整理し相互関係を検討することなどの最終報告書取りまとめ方針を確認した。</p>		
研究の動向	東シナ海漁業資源部	東シナ海海洋環境部	海区水産業研究部	石垣支所
	<p>*東シナ海大陸斜面の底魚資源調査（10月28日～11月20日，陽光丸）                  第1次調査（10月28日～11月7日）では重要底魚類の着底期幼魚の採集を目的として二重カバーネット付きの着底トロール調査を実施した。第2次調査（11月9日～20日）では重要底魚類の着底期幼魚の採集及び浮遊期稚魚の採集を目的としてソリネット及びIKMTネットの階段曳を実施した。調査により，アカムツ・クロナギの着底期幼魚が多数，及びキダイと思われるタイ科浮遊期稚魚2尾が採集された。                  *サバ類標識放流調査（11月8日～28日，江の島丸）                  南下期におけるサバ類の分布・回遊経路を把握するため，五島列島から対馬周辺海域で，神奈川県水産総合研究所江の島丸（99トン）によりサバ類の標識放流調査を行った。本年は立縄釣り等で漁獲した176尾（マサバ121尾，ゴマサバ52尾，種不明3尾）を対馬北端東の2地点で放流した。まとまった魚探反応が北松海域と対馬東水域で見られた。対馬北東の操業域は韓国南・東岸から延びる表面水温19台の低水温域（他の操業域は20以上）で，ここで放流サバ類を漁獲した。両種とも大半はFL30cm以上の大型魚で，マサバの体長モードは35cmと26cm，最大で39cmであった。標識放流は今回を含め3年間行い，過去2回は約2千尾づつ放流してわずか1尾の再捕にとどまっている。本調査は本年度をもって放流調査を終了する。</p>	<p>*第54回西日本海洋調査技術連絡会議（12月12日，鹿児島市）                  関係省庁の海洋モニタリングの現状が報告され，各機関ともモニタリング関連予算が削減されるなど厳しい状況にあることが明らかになった。このような状況を打破するためには，今後調査船による観測の他に観測ブイシステム（200B計画など）によるデータ収集が不可欠であり，そのためには技術開発に向けたプロジェクトを立ち上げるなど新たな取り組みの必要性が論議された。                  *海洋モニタリングの推進について                  西海ブロックにおける各種会議などを通じて海洋モニタリングの維持・進展について具体的な行動を起こすことの必要性が強くなっている。特に，観測ブイシステムの構築にターゲットを絞り込んで取り組むことが肝要である。行動内容は技術的問題対応と予算的問題対応に大別できる。技術的問題については測点・測定内容関係，センサー類関係，ブイ・係留関係，通信技術関係，データ処理関係等々多くの専門的知見を結集し，当該システムのマスタープランを作りたい。予算問題は大所高所から多くの海洋関係省庁の連携を視野に入れて取り組みたい。海洋モニタリングそのものは研究ではないが，海洋環境研究の基盤となるためその動向には注意を払う必要がある。</p>	<p>*タイラギ健康状態のモニタリング調査                  産卵後のタイラギ平殻筋と外殻膜のグリコーゲン含量は9月以降回復が期待されたが，餌となる珪藻が少なかったためにその後も減少傾向が継続し，12月には2mg/g以下となっている。                  *開洋丸による「イセエビ幼生の生態及び黒潮沖合域の海洋環境調査」                  船上での摂餌試験によって，フィロソーマ幼生がウキゴカイ類とヤムシを捕食することが確認できたため，ネット採集で得られたプランクトン試料から，これら餌生物の分布域や量的検討を進めている。また，投入したオーブコムブイの約3カ月に渡る追跡調査から初期幼生の予想を越えた南下速度を裏付ける結果が得られた。                  *藻食性魚類による大型褐藻類に対する食害調査                  平成10年度に食害が大規模に発生した長崎県野母崎町地先水域では，今年も秋以降に食害が発生した。特に水深5m以深のクロメの多くが食害を受けたが，全体的に見れば平成11年度に引き続き比較的軽度であった。                  *次期プロジェクト研究「生態系保全型増養殖システム確立のための種苗生産・放流技術の確立」の予備調査                  コレクターによる暖流系アワビ着底稚貝採集の予備調査始めた。このため，長崎県総合水試，地元漁協の協力を得て平戸・度島及び壱岐・郷ノ浦にコレクターを設置した。</p>	<p>*石垣島におけるウミガメの産卵状況                  石垣島伊原間牧場海岸へ産卵に來遊するアオウミガメは年に3～7頭であり，1頭が11～14日間隔で最大7回まで産卵することが明らかになった。標識及び甲羅模様の比較から，1996年以降放流した延べ22頭のうち10頭が3～4年後に産卵帰し，アオウミガメが個体ごとに特定の産卵場を利用することが示された。石垣島全体に引き延ばすと，石垣島で産卵するアオウミガメは年に10～20頭と推定される。かつて産卵数が優占していたアカウミガメの産卵は年に2～3頭に減少しており，資源の動向が懸念される。                  *スジアラ育成礁の餌料供給能に関する調査                  サンゴ礁池外縁に設置した育成礁の上部と周辺のガレ場に各4個の籠を設置してスジアラ種苗（平均全長32，51，97mm）を収容し，数日毎に籠ごと回収して摂餌状況を胃内容物により調査した。その結果，51及び97mmサイズではほとんど摂餌はなかったが，32mmサイズでは収容2日目から甲殻類等の摂餌が見られ，どちらの試験区においても日数の経過にしたがって摂餌率が増加する傾向が認められた。これらの結果から，スジアラ小型種苗には育成礁のもつ餌料培養能が有効に機能する可能性が示唆された。</p>

## 西海ブロック水産研究及び水産業情報（県水産試験場等）

No.31 平成13年1月（平成12年10月～12月分）

西海区水産研究所

		水産資源関係	水産海洋・漁場環境保全関係	水産増養殖関係	その他（水産利用加工，水産経済関係，災害等）
水産業の動向	山口県	<p>* 外海：棒受網漁が長期間不振。サワラ(サゴシ)、ウスバハギ、カンパチの好漁が長期間継続。まぐろ、かつお類の来遊が例年より目立つ。ケンサキイカの水揚げが例年より大幅減。</p>	<p>* 外海：9月末～10月上旬にエチゼンクラゲが大量に来遊。10月末～11月上旬に終息。大きな漁業被害は無かった。今年にはマガキ貝毒の発生は無く、出荷も終了。</p>	<p>* 特になし</p>	<p>* 10月14日水産研究センター(試験場)創立100周年記念講演会を開催。記念講演：「21世紀を展望した水産海洋研究について」(水産大学校長 三本菅善昭) 山口県外海水産試験場で学んだこと(前日水研所長 小川嘉彦)漁業者代表等、約250名参加。</p>
	福岡県	<p>* 研究部：カタクチイワシ魚群少ない。漁船漁業は全般的に平年並み。ヤリイカ少なくスルメイカ多い。クルマエビ不漁。ヨシエビやや悪い。</p> <p>* 有明海：アサリ不漁、タイラギ不漁。</p> <p>* 豊前海：ガザミ大漁、クルマエビ、ヨシエビやや好漁、シャコ好漁、カレイ、コチ不漁。</p> <p>* 内水面：アユ例年より良い。オイカワは例年より悪い。モクズカニは矢部川で多い、筑後川で例年並み。コイ、フナは例年並。ワカサギは良い</p>	<p>* 研究部：福岡湾で11月7～11日に珪藻赤潮が発生。12月上旬、筑前湾にギムノディニウム カテナタムが発生。12月中旬、貝毒検査の結果、加布里養殖カキに2.5MU/gの麻痺性貝毒検出(福岡県では初の検出)。その後の、プランクトン及び貝毒検査結果から各カキ養殖漁協に出荷自主規制及び出荷規制を要請(12月31日現在継続中)。天然カキ、ハマグリ、アサリは非検出。</p> <p>* 有明海：水温：10～12月高め。塩分：10月平年並み、11月1日台風20号の影響により季節はずれの降雨で塩分低下、11月上旬まで低塩分、11月中旬以降やや低め～平年並みで推移。赤潮：10月(9月から継続)1件スケルトネマ、被害なし。12月1件リゾソレニア、のり色落被害。</p> <p>* 豊前海：水温は平年並みからかなり高めで推移。塩分は平年やや高めで推移。DINはやや高めで推移。麻痺性貝毒原因プランクトンギムノディニウム カテナタム発生(貝毒は基準値以下)</p>	<p>* 研究部：のり養殖順調に生産。わかめ養殖生育やや悪い。かき養殖貝毒発生のため一部地域で自主出荷規制中。</p> <p>* 有明海：10月採苗、11月上旬の比重低下により、河口域で低比重被害発生。さらに高水温低比重により、あかぐされ病被害甚大。11月末日で秋芽生産終漁。12月4日冷凍生産開始。12月中旬にけい藻プランクトン増殖、海水中の栄養塩低下によりノリの色落ち拡大。12月末日までの生産は2.8億枚、34.9億円であり、生産額ベースで平年同期比46%の作柄。</p> <p>* 豊前海：カキは高水温により身入りの遅れあり。ノリは11月の降雨による低塩分の影響あり。</p>	<p>* 有明：沖合域のタイラギは2年連続不漁。徒歩による干潟域の採捕は良。</p>
	佐賀県	<p>* 玄海：唐津湾のカタクチイワシ不漁。沿岸のサバ不漁。</p> <p>* 有明：12月17日からタイラギ漁が解禁。昨年引き続き漁獲が見込めない。</p>	<p>* 玄海：赤潮発生なし。麻痺性貝毒発生は12月14、18日の2回(唐津湾の養殖カキ) 毒力：3.3MU/g。原因プランクトン：ギムノディニウム・カテナタムで継続発生中。壱岐水道の表層水温、10～11月が平年並からやや高め、12月がやや高めで推移。沿岸域の表層水温は、平年並から2 高めで推移。</p> <p>* 有明：微細藻類(フィロコプサ ジャボニカ)六角川以西漁場で発生。ほぼ1カ月間継続。(10月上旬～11月上旬)12月上旬以降、全域で珪藻類が増殖。</p>	<p>* 玄海：養殖カサゴ出荷。</p> <p>* 有明：12月上旬以降ノリの色落ち被害発生。秋芽網生産実績。枚数：3億165万枚。金額：38億9278万円、単価12.90円</p>	<p>* 佐賀玄海：資源回復計画に係る意見交換会開催(10月)</p>
	長崎県	<p>* スルメイカ：12月下旬に好漁。</p> <p>* ヨコワ：全般に低調。</p> <p>* 対馬の飼付ブリ：低調。</p>	<p>* 長崎県近海の表面水温は、全般には前年に比べやや低め、平年に比べ高めに経過。</p>	<p>* 特になし</p>	<p>* 特になし</p>

水 産 業 の 動 向	熊本県	<p>*有明海：この時期が盛期のコウライアカシタピラメとメイタガレイが不漁。また、タイラギは大量へい死により漁獲なし。</p> <p>*牛深港中型まき網漁業：昨年同期と比較し1.8倍の水揚げがあった。これは、カタクチイワシが多く水揚げされたため。</p>	<p>*有明海・八代海の水温は10月～12月にかけて、平年に較べ高めに推移。</p> <p>*有明海：10～11月に珪藻赤潮が発生し、12月には熊本市沖でヘテロシグマ アカシオによる赤潮が発生。</p> <p>*八代海：12月に新和町でギムノディニウム カテナータムが出現し、貝毒量も最大で182MUまで上昇。また、アレキサンドリウム フラタキユラスが確認され、学会で有毒説が報告されるなど注意を要する状況。</p>	<p>*12月上旬の珪藻赤潮の発生により海域の栄養塩量が大きく減少し養殖ノリの色落ちを引き起こした。色落ちは、1部会北部、沖合漁場を中心に拡大しており生産量の落ち込みが懸念される。</p> <p>*真珠養殖では、アコヤガイの赤変化が見られた地区もあったが、昨年までのような大量死は見られなかった。</p>	*特になし
	大分県	<p>*豊後水道におけるまき網のマアジは8月以降の豊漁が継続、さば類は不漁平年の2～3割程度。</p>	<p>*12月中旬アレキサンドリウム カテナラによる毒化によりカキ出荷自主規制。</p>	*特になし	*特になし
	宮崎県	<p>*まき網漁業：10～11月はマアジ・マルアジ・オアカム口主体にカタクチ・サバ他を漁獲し、低調だった前年同期を大幅に上回った。12月になりウルメ・サバ主体に前年を上回った。船曳・バッチ網漁業は10～11月は低調。12月は前年同期を上回る。曳網漁業は10～11月は低調、12月は前年同期を上回る。</p>	<p>*黒潮は10月～11月前半まではやや離岸、後半から現在まで接岸、後半から現在まで接岸の状態経過。表面水温は10月が平年並み、11～12月は高めに経過。沿岸水温は、10月以降現在まで平年並みで経過。</p>	<p>*クルマエビを県北部の北浦町で2,333尾（11月4日、青色リボンタグ、TL125.2±4.23mm、BW15.0±1.49g）標識放流をした。12月28日現在再補報告なし。</p>	*特になし
	鹿児島県	<p>*マアジは10、11月は前年を下回り、12月は前年並みとなったが、低調である。サバ類は10、11月は前年を上回ったが、12月は前年・平年を下回った。マイワシ、ウルメイワシは前年を下回り、低調である。南薩方面のブリ飼付漁業で10数年ぶりにヒラマサが漁獲された。</p>	<p>*本県沿岸域の水温：10月以降も平年並～やや高めで推移している。黒潮水温は、9、10月まで低めであったが、11月からやや高め～かなり高めで推移している。高水温のためか、ホンダワラ類の発芽確認の時期が遅く（11月下旬）、ヒトエグサの発育状況も悪い。</p>	*特になし	*特になし
	沖縄県	<p>*ソデイカの漁獲状況：2000年11月は98.3 tで前年同月（141.5 t）の3割減。</p>	*特になし	*特になし	*特になし
	その他 (国への要望等)	*特になし	*特になし	*大分：種苗生産技術開発関係予算の国庫補助金を要望。	

## 西海ブロック水産研究及び水産業情報(県水産試験場等)

No.31 平成13年1月(平成12年10月~12月分)

西海区水産研究所

	水産資源関係	水産海洋・漁場環境保全関係	水産増養殖関係	その他(水産利用加工, 水産経済関係, 災害等)	
研究 の 動 向	山口県	* 内海: 底曳2種, 3種の漁具効率比較試験を実施。	* 外海: 水温は10月は平年並。11月は沿岸域の表層~50m層にかけてやや高め, 沖合域では表層がやや高め。塩分は10月はかなり低め~はなはだ低め。11月は若干回復したものの表層~50m層ではやや低め~はなはだ低め。	* 外海: 11月に, オニオコゼ放流効果調査のため, ALC標識魚6,000尾(全長5cm)を下関市安岡地先に放流。 * 内海: 貝殻アマノリ養殖試験中(植え込み方式)。アサリ, ミルクイガイ, ウチムラサキの放流技術開発試験実施中。養殖クルマエビのPAV発生は今年も無く, ほぼ出荷終了。	* 特になし
	福岡県	* 研究部: 魚礁調査。カタクチイワシ魚群量調査。トラフグ漁獲物調査。エビ類の付加価値向上対策調査。 * 有明海: タイラギ資源調査。クルマエビ追跡調査。 * 豊前海: 小型底びき網資源調査。人工魚礁効果調査。アサリ減耗要因調査。 * 内水面: 降下仔アユ調査。	* 研究部: 浅海, 沿岸, 沖合各定線調査。漁場生産力モデル開発基礎調査。漁場環境保全推進事業(漁場環境調査, 赤潮発生監視調査, 貝毒発生監視調査)。唐津湾類型指定調査。水質監視調査。グミ生態等解明室内試験。 * 有明海: 浅海定線調査。赤潮調査。貝毒モニタリング調査等。 * 豊前海: 新漁業管理制度推進情報提供事業調査。漁場保全調査。赤潮, 貝毒調査。 * 内水面: 漁場環境調査(筑後川, 矢部川)。生物モニタリング調査。星野川調査。	* 研究部: クルマエビ標識放流調査。アワビ, クルマエビ中間育成放流調査指導。アカナマコ種苗生産放流技術開発調査。クロアワビ陸上中間育成技術開発調査。メガイアワビ種苗生産放流技術開発調査。フトモズク採苗試験。 * 有明海: エツ, コウライアカシタピラメ増殖研究。 * 豊前海: カキ養殖調査。ノリ養殖調査。アカガイ養殖調査。ガザミ, シヤコ蓄養実験。 * 内水面: 水産生物育種の効率化基礎技術の開発研究試験。(耐病性評価と選抜, DNA解析)モクスガニ種苗放流調査。アユ冷水病保菌調査。オйкаワ種苗放流調査。	* 研究部: 低価格魚の有効利用(ボラ)。カタクチイワシ脱脂試験。
	佐賀県	* 玄海: マダイ流通追跡調査実施(11~12月) * 有明: タイラギ11年度, 12年度発生群の成長等の追跡調査を実施。昨年7月に発生したタイラギへい死原因について調査, 研究を実施。	* 玄海: 唐津湾グミ分布調査実施(12月)。	* 玄海: 真珠養殖業緊急対策試験で5月に沖出しの自県産アコヤガイ稚貝の成長, 生き残りとも順調。 * 有明: アゲマキ人工種苗の基礎技術開発試験実施中。 * 栽培: エゾアワビ, アカウニ, パファンウニ種苗生産研究。ナマコ放流調査。	* 特になし
	長崎県	* 卵稚仔調査(五島灘, 西沖: 10月)。シラス分布調査(五島灘, 橋湾: 10月)。アオリイカ標識放流調査(奈留町: 10月)。浅海定線調査(有明海: 10月)。イサキ測定調査(小値賀町: 10,11月)。漁況週報の発表(毎週木曜日)。魚礁効果調査(島原: 10月)。定置網漁場調査・人工魚礁魚群集積状況調査(五島灘, 橋湾: 10, 11月)。五島海堆調査(五島西沖: 10,11月)。トラフグ市場調査(柳川市, 大牟田, 布津他: 10, 11, 12月)。オコゼ放流(西有家: 全長6cm, 1,285尾, 10月)。クルマエビ追跡調査(深江, 島原, 戸石他: 10, 11, 12月)。カサゴ漁獲物調査(大瀬戸, 口之津他: 10, 12月)。アワビ漁獲物調査(中野, 度島, 大島: 10, 11, 12月)。アワビ剥離・選別作業(10月)。アワビ標識付試験(メガイ24,000個: 10, 11月)。ホシガレイ調査(西有家, 南串山: 10, 11, 12月)。沿岸定	* ヘテロカプサ調査(大村湾: 10, 11, 12月)。	* 魚類種苗生産現地指導(県内各種苗量産施設: 10月)。アサリ漁場調査(小長井町: 10, 11, 12月)。多項目水質測定器設置, 管理(小長井町: 10, 11, 12月)。カキ養殖状況調査及び付着物調査(小長井町: 10, 11, 12月)。アマモ移植試験及び生育状況調査(琴海町猪越, 島原市: 10, 11, 12月)。ヒジキ生育状況調査(西彼半島面高~野母, 上対馬町, 厳原町: 10, 11, 12月)。トコブシ種苗生産試験(約20万個飼育中: 10月~)ホンダワラ類増殖試験(大瀬戸町: 10, 11, 12月)。マダカアワビ種苗生産試験(約20万個飼育中: 10月~)。魚病診断(10月16件, 11月11件, 12月10件)。オニオコゼ成熟状況調査(11, 12月)。プリ催熟試験(11, 12月)。養殖ワカメ生育状況調査(島原市: 11, 12月)。カサゴ種苗量産試験(12月~)。	* カタクチイワシ体成分分析調査(10, 11, 12月)。マサバかまぼこ適性試験(10, 11月)。塩干品品質改善およびねり製品予備試験(10, 11, 12月)。シイラ冷凍原料すり身化試験(10, 11, 12月)。アマダイ褪色防止等試験(10, 11, 12月)。

研 究 の 動 向		線調査（五島灘，西沖：11月）。延縄餌料試験（五島灘：11月）。魚群分布調査（壱岐西方海域：11月）。マダイ測定調査（鷹島町：11，12月）。キピナゴ刺網試験（五島：11月）。魚群分布調査（北松，西彼，橘湾：12月）。刺網調査（壱岐：12月）。ヒラメ測定（島原市：12月）。優良天然礁海底地形調査（五島灘，対馬海峡，七里が首根：12月）。人工礁漁場蛸集状況調査（五島：12月）。アワビ成熟度調査（12月）。			
	熊本県	*マダイ・ヒラメの放流魚混獲率調査。アサリ干潟調査。沿岸定線・稚魚調査。	*有害プランクトン等モニタリング調査。貝毒プランクトンモニタリング調査。 *浅海・内湾定線調査。 *浦湾（養殖漁場底質）調査。	*持続的養殖生産推進事業。環境調和型魚類養殖育成技術開発試験。ノリ養殖総合対策試験。地域先端技術共同研究開発促進事業（全雌ヒラメ実用化試験）。高品質アコヤガイ育成促進事業（大量へい死対策試験）。種苗生産技術開発試験（ブリ早期産卵試験）。	*海藻高度利用技術開発試験。コウイカ出荷技術改良試験。乾ノリ細菌試験。
	大分県	*ナマコ放流効果試験（11月上旬）。キジハタ標識放流（12月上旬）。渓流域調査。陸封アコ調査（松原，下笠ダム）。アコ採卵。	*定線調査，保護水面調査の実施。生物モニタリング調査（大分川）。	*ぶり早期採卵準備（2月中旬採卵予定）。	*特になし
	宮崎県	*特になし	*特になし	*特になし	*特になし
	鹿児島県	*沿岸資源動向調査（キピナゴ，トビウオ，バジョウカジキ，ソデイカ，イサキ）。マアジ，サバ測定調査。メバチ，キワダ標識放流調査。ヌタウナギ資源調査。キンメダイ，ユメカサゴ資源調査。ソデイカ資源調査。藻場分布調査。	*沖合・浅海定線観測。海底地形調査（奄美・熊本海域）。魚類へい死事故原因調査（2件）。ホンダワラ類発芽状況調査。養殖漁場環境点検調査（水質，底質，潮流等）。鹿児島湾における溶存酸素等の観測，データの収集・提供。	*マダイ，ヒラメ，クルマエビ放流効果調査。高品質固形飼料試験及び低コスト型飼料開発研究に係るブリ，マダイの飼育試験を終了。	*ウルメイワシ丸干しの保管温度ごとのヒスタミン生成量調査。かつお節加工残滓液汁の膜処理試験。サメ肉の脱尿素・ソーセージ改良・みそ漬け試作等試験。
沖縄県	*ソデイカのポップアップタグ放流を行い，衛星による信号の受信に成功した。ポップアップタグの受信成功は日本初。	*特になし	*水試本場：平成12年10月にトコブシ種苗（殻長20～28mm）を74千個出荷。 *八重山支場：ヒレナシジャコ養殖用種苗（殻幅6.4～29.9mm）93千個配布。ヒレジャコ養殖用種苗（殻幅6.3～18.8mm）130千個配布。ヤコウガイ標識放流 12月1日 殻高25mm 石垣市白保沖 4,200個。 *栽培：ハマフエフキ種苗生産 77mm 15千尾出荷。マダイ種苗生産 親魚：10月11日陸揚げ・調整，12月7日より採卵開始。稚魚：12月14～18日500万粒を収容，早期飼育試験開始。タイワンガザミ種苗生産；メガロバ期幼生3000千尾斃死。シラヒゲウニ種苗生産；12月末 殻径1～5mm 70千個体飼育中。12月5日 第4回採卵，幼生飼育中。タカセガイ種苗生産；10月19日 採卵，種苗生産再開。餌料生物；ナンノクロロブシ 10月10日 拡大培養開始。 12月末 127トン/2,000万セル保有。ワムシS型 11月22日 拡大培養開始 12月15日から供給開始 2～5億個/日。	*特になし	

## 所内談話会

第330回 12年11月24日

1. Amultispecies prawn fishery in Albatross Bay Australia

Young C.PARK (STAフェロー)

2. Stock size fluctuarions in chub and spotted mackerel in the East China Sea and adjacent waters

檜山義明, 依田真里

3. Fish distribution, diversity, food-chain and energy flow in brackish water areas under deffering conditions of preservation in mangrove forests on the west coast of Peninsular Malaysia

早瀬茂雄

第331回 12年12月8日

1. 薩南海域における表層の流況とその時間変動

種子田雄・森永健司・中川倫寿

西野博 (鹿児島水試)

2. 春季の東シナ海縁辺部における濁度分布と懸濁粒子の輸送過程

岡村和磨・横内克巳

藤原豪 (科学技術振興事業団)

第332回 12年12月19日

1. 曳航式深海用ビデオカメラによるズワイガニ類の生息密度推定法

渡部俊広 (水産工学研究所)

## 石垣支所談話会

第38回 12年11月29日

1. 飼育キハダの初期成長

清水弘文

塩澤 聡 (日裁協)

2. 人工採苗キハダの骨格異常

清水弘文

塩澤 聡 (日裁協)

3. 石垣島近海におけるクロチョウガイ *Pinctada margaritifera* 飼育個体の斃死 (1999年の調査結果)

栗原健夫, 水戸啓一

4. 石垣島における食用巻貝カンギク *Lunella granulata* の形態の可塑性

栗原健夫

鹿谷麻夕, 西田 睦 (東大海洋研-海洋生命科学)

第39回 12年12月15日

1. 白化に伴う塊状造礁サンゴ *Potites lutea* の代謝の変化

林原 毅

秦 浩司 (科学技術振興事業団)

佐野元彦

福岡弘紀 (科学技術振興事業団)

皆川 恵

2. 赤土がハナヤサイサンゴの遺伝子発現に与える影響

橋本和正

萱野英子 (東大工)

萱野暁明 (農林水産技術会議事務局)

渋谷拓郎, 阿部 寧, 高田宜武

## 業績一覽

西海水研

### 論文

浅野謙治

マアジ資源のABC算定

月刊海洋 33(1),17-21 (2001)

大下誠二

東シナ海におけるマアジの成熟特性に関する研究

東シナ海漁海況研報, 8, 27-33

Nishida, T., Ogura, M. and Yano, K.

Atlas of the conventional tag release-recapture information based on the Nippon-maru survey cruises (1980-2000).

IOTC/2000/WPTT/Inf 6, Victoria, Seychelles, 1-8 (2000)

Yano, K. and J. A. Musick

The effect of the mesoparasitic barnacle *Anelasma*

on the development of reproductive organs of deep-sea squaloid sharks, *Centroscyllium* and *Etmopterus*.

Env. Biol. Fish., 59, 329-339 (2000)

## 口頭発表

征矢野清・北條智之・岡松一樹・坂本達也・輿石裕一・松原孝博・大久保信行・石松惇

有明海におけるトビハゼの血中ピテロジェニン濃度の季節変化(第3回環境ホルモン学会)

洪野拓郎

サンゴ礁に生物多様性を見る(地球環境研究総合推進費公開シンポジウム～海洋と生物多様性の“今”;地球の“未来”を考えよう～)

佐々木智史・洪野拓郎・山岡耕作

アマモ場におけるヒメジ科魚類の摂食行動(日本魚類学会年会)

阿部 寧・谷崎樹生・佐野清貴・船倉祐二・石井久和・岡村 康・高田宜武・洪野拓郎・橋本和正

石垣島におけるウミガメ産卵状況(第11回日本ウミガメ会議)

金城清昭・矢野和成・太田 格・七條裕蔵・小菅丈治  
沖縄近海におけるソデイカの日周行動(日本水産学会秋季大会)

Yano, K., Ito, T., Shimizu, H. and Kosuge, T.

Telemetry studies on the movements of the manta ray, *Manta birostris* at the Yaeyama Islands, Okinawa, Japan. (80th Annual meeting of the American Society of Ichthyologists and Herpetologists, La Paz, Mexico)

Yano, K.

Reproductive strategy and feeding of deep sea sharks. (First meeting on deep-sea sharks: Biology, Distribution, Exploitation. Concarneau, France)

Yano, K.

Research on Shark in Japan. (Special Seminar of National University of Ireland, University College Dublin, Ireland)

Yano, K.

Biology of deep-sea sharks. (Special Seminar of National University of Ireland, University College Cork, Ireland)

栗原健夫・鹿谷麻夕・西田睦

石垣島における食用巻貝カンギク *Lunella granulata* の形態の可塑性.(日本ベントス学会第14回大会)

Kurihara, T., Katoh, M., Kobayashi, M. and Mito, K.

Diversity of coastal fishery resources in subtropical Japan. (UJNR Aquaculture Panel, 29th Joint Meeting, Satellite Symposium)

Minagawa, M.

Ishigaki Tropical Station Aquaculture and Resource Enhancement Studies: Present status and direction. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: Satellite Symposium)

佐野元彦・福岡弘紀・玉城泉也・林原毅・皆川恵・村越正慶

石垣島海草藻場に放流したハマフエフキ人工種苗と天然魚の胃内容物(日本水産学会秋季大会)

Sano, M., Minagawa, M., Sugiyama, A. and Nakajima, K.

Diseases of cultured marine fish in subtropical areas of Japan.(UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting.)

## ポスター

S. OHSHIMO

Acoustic surveys for small pelagic fish in the East China Sea. (Acoust 2000)

Shibuno T, Abe O, Hashimoto K, Takada Y

Changes in the structure of fish communities following coral bleaching in the summer of 1998 at Urasoko Bay, Ishigaki Island, Japan.(9th International Coral Reef Symposium)

Hashimoto, K., Kayano, E., Kayano, T., Shibuno, T., Abe, O. and Takada, Y.

Effects of sedimentation on gene expression of the scleractinian coral *Pocillopora damicornis*. (9th International Coral Reef Symposium, Bali Island, Indonesia) (UJNR Aquaculture Panel, 29th Joint Meeting, Satellite Symposium)

Shimizu, H. and Shiozawa, S.

Bone abnormality of hatchery-reared yellowfin tuna (*Thunnus albacares*). (UJNR Aquaculture Panel, 29th Joint Meeting, Satellite Symposium)

清水弘文・塩澤 聡

飼育キハダの初期成長 (平成12年度日本魚類学会年会)

栗原健夫・水戸啓一

石垣島近海におけるクロチョウガイ *Pinctada margaritifera* 飼育個体の斃死 (予報). (日本ベントス学会第14回大会)

Katoh, K. and Matsuura, K.

Phylogeny of Tetraodontiforms (Teleostei, Pisces). (魚介類ゲノムに関する国際シンポジウム)

Kiso, K., Mahyam, M.I. and Muhammad Fadzil, H.

Demersal fish fauna under different levels of developmental activity in mangrove areas of west coast Peninsular Malaysia. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: Satellite Symposium)

Katoh, M., Kobayashi, M., Kurihara, T. and Mito, K.

Genetic structure of the Japanese eel (*Anguilla japonica*) from Japan and Taiwan. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: Satellite Symposium)

Abe, K.

Cd in the western equatorial Pacific. (AGU 2000 Fall

Meeting アメリカ地球物理学連合2000年秋季大会)

Nishihama, S. and Mito, K.

Population ecology of *Holothuria atra* in coral reef lagoon of Ishigaki Is. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: Satellite Symposium)

Hayashibara, T., Iwao, K. and Minagawa, M.

Coral reef restoration by enhancing coral recruitment through larval seeding: the concept and preliminary studies. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: Satellite Symposium)

Kiyomoto, S. and Yoshimura T.

Impact of grazing by herbivorous fishes on large Brown Algal Bed. (UJNR Aquaculture Panel, 29th joint meeting: satellite symposium)

Hayashibara, T., Iwao, K., Sano, M., Minagawa, M., Tamaki, M. and Fukuoka, K.

Electron microscopic observations on the settlement of *Acropora* planulae. (9th International Coral Reef Symposium)

Shimoike, K. and Hayashibara T.

A decade of study on coral spawning at Akajima Island, Okinawa Japan. (9th International Coral Reef Symposium.)

Minagawa M, Tamaki M, Sano M, Hayashibara T, and Fukuoka K

Feeding amount and habitat characters of the mud whelk, *Terebralia palustris* in Okinawa Japan. (Meeting on Mangrove Macrobenthos, Mombasa 2000)

## その他

Fujiwara, S., Shibuno, T., Mito, K., Nakai, T., Sasaki, Y., Chang-feng D, and Gang C,

Status of Coral Reefs of East and North Asia: China, Japan and Taiwan

Status of Coral Reefs of the World: 2000, edited by C.Wilkinson, pp131-140 (2000)

Sano, M., Tamaki, M. and Rakotonaivo, H.

Basic technique for PCR, in basic microbiology for marine shrimp aquaculture.

Technical report No.14 of the Aquaculture Development Project in the Northwest Coast in Madagascar, JICA/Madagascar, pp27 (2000)

# 人 事 異 動

## 転入者

1月1日付

命 西海区水産研究所石垣支所主任研究官

山田秀秋

(東北区水産研究所海区水産業研究部主任研究官)

## 転出者

1月1日付

命 中央水産研究所企画調整部主任研究官

早瀬茂雄

(西海区水産研究所

東シナ海海洋環境部高次生産研究室長)

## 西 海 水 研 日 誌

### 会議

10 月		11 月	
2～3	但州丸調査に関する打ち合わせ 横浜市(伊藤技官)	1	九州地区幹部行政官セミナー 福岡市(嶋津所長)
2～4	平成12年度地球環境研究総合推進費公開シンポジウム 東京都(澁野室長)	16～18	南西諸島栽培漁業技術連絡協議会技術部会 鹿児島市(酒井企連室長・佐藤支所長・皆川室長)
3	インターネット博覧会長崎県パピリオン検討委員会 長崎市(木元企連科長)	20	資源添加率向上技術開発事業クルマエビ担当者会議 長崎市(吉村・皆川室長)
4～5	開発センタートラフグ調査検討会 福岡市(伊藤技官)	21～22	九州農業試験場試験研究推進会議 熊本県西合志町(嶋津所長)
10～13	平成12年度水産業関係試験研究推進会議 横浜市(原資源部長, 木谷海洋部長, 佐藤支所長)	21	平成12年度八重山地区協議会 石垣市(佐藤支所長)
11～13	九州沖縄地域食品関係試験研究場所長会 宮崎市(嶋津所長)	25～12/3	浙江省海洋水産養殖研究所における集中講義 温州市・中国(村井海区部長)
11～13	平成12年度水産業関係試験研究推進会議 横浜市(村井海区部長)	27	国有財産事務担当者連絡会議 福岡市(瀬川課長補佐)
15～18	石垣支所研究打ち合わせ及び漁況海況予報会議 石垣市, 那覇市(嶋津所長)	27～29	独法会計基準Q&A説明会 横浜市(萬・樋渡・川端・半田係長)
16～18	第73回長期漁況海況予報会議 那覇市(原資源部長, 木谷海洋部長, 浅野国研官, 中川・檜山室長, 森永・大下技官)	27～12/1	安定同位体測定 広島県大野町(横内室長)
17～18	都道府県水産試験場育成強化事業事前評価会議 東京都(吉村室長)	29～30	ジ・ンバンク担当者会議 東京都(藤吉技官)
19～27	P I C E S 年次総会 函館市(大下・西内技官)	29～12/2	G S K底魚部会及び同委員会 釧路市(堀川・早瀬室長, 伊藤・山本技官)
20	長崎県水産基盤整備基本指針説明会・地域懇談会 新長崎漁港(酒井企連室長)	29～12/2	G S K底魚部会及び同委員会並びにプロ研打ち合わせ 釧路市(原資源部長)
31	漁場環境保全推進事業ブロック会議 佐賀市(渡辺・横内室長)	30	亜熱帯水産業研究部会 石垣市(佐藤支所長他)

12 月

1~2	ブロック別漁業者会議（九州西部） 及び研究打ち合わせ 福岡市（浅野 国研官）	13~15	会及び研究打ち合わせ 熊本市（原 資源部長） 水産庁研究所庶務部課長懇談会 横 浜市（染木庶務課長）
4~6	水産庁企画連絡室長会議及び懇談会 東京都・横浜市（酒井企連室長）	15~16	沿岸資源班関係委任事業打ち合わせ 横浜市（原資源部長）
4~6	施設関係事務打ち合わせ 石垣市 （瀬川課長補佐）	18	国有財産事務担当者連絡会議 福岡 市（瀬川課長補佐）
6~8	タイラギ研究打ち合わせ会 伊勢市 （渡辺室長，垠本技官）	21	タイラギへい死緊急担当者会議 柳 川市（村井海区部長，垠本技官）
9~10	沖縄ウミガメ会議 糸満市（阿部技 官）	21~22	赤潮・貝毒分科会 広島市（渡辺室 長）
13~14	魚類分科会 長崎市（嶋津所長他）	25~26	漁場生産力モデル開発基礎調査担当 者会議 所内会議室
13~14	東シナ海地域及び九州水産統計協議		

学会・研究集会・シンポジウム

10 月

6~9	日本魚類学会 小田原市（清水・加 藤技官）	12~18	垣市（木谷海洋部長，村井海区部長， 木元企連科長，早瀬・横内・輿石室長， 清本節技官，佐藤支所長他） U J N R サテライトシンポジウム及 び所長懇談会 石垣市及び東京都 （嶋津所長）
13~16	日本ベントス学会第14回大会 仙台 市（栗原技官）	16~17	東京大学海洋研究所シンポジウム 東京都（檜山室長）
20~11/9	国際サンゴ礁シンポジウム出席及び 研究施設等の視察 インドネシア （橋本技官）		
21~29	国際サンゴ礁シンポジウム インドネ シア パリ島（澁野室長，林原技官）	11~14	12 月 第54回西日本海洋調査技術連絡会及 び水産海洋学会等シンポジウム 鹿 児島市（木谷海洋部長，中川室長， 岡村・種子田技官）

11 月

9~11	魚介類ゲノムに関する国際シンポジ ウム 東京都（加藤技官）	14~22	アメリカ地球物理学連会2000年秋季 大会 サンフランシスコ（阿部室長）
12~16	U J N R サテライトシンポジウム 石		

調査

10 月

28~11/20	陽光丸第8次航海 東シナ海陸棚斜 面域底魚資源生態調査（堀川室長， 伊藤・依田技官）	7~9	11 月 磯焼け地帯におけるイセエビ着底量 調査 静岡県（吉村室長，清本節技 官）
19~20	タイラギ調査 柳川市（渡辺室長・ 垠本技官）	6~7	放射能特定調査 佐世保市（早瀬室 長，西内・道脇技官）
26~27	環境ホルモン調査 柳川市（輿石室 長，垠本技官）	9~28	サバ類標識放流（江の島丸）（小西室 長）
24	浅海域における表在性ベントスの分 布生態調査 加津佐町（輿石室長， 清本節技官）	9~20	東シナ海大陸斜面域底魚資源調査（陽 光丸第8 - 2次航海）（堀川室長，依 田技官）
26~27	磯根資源調査 平戸市（輿石室長・		

14 ~ 24	天鷹丸第110次航海乗船 四国沖~九州南東沖(種子田技官)	9	磯根資源調査 平戸市(清本技官)
15 ~ 16	定置水温計の交換作業 甌島(森永技官)	11 ~ 12	環境ホルモン調査 柳川市(渡辺室長・塚本技官)
28	浅海域における表在性ベントスの分布生態調査 加津佐町(輿石室長, 清本節技官)	14 ~ 15	タイラギ調査 柳川市(塚本技官)
24	磯根資源調査 平戸市(清本節技官)	18 ~ 19	磯根資源調査 壱岐郷浦町(輿石室長, 清本節技官)
19 ~ 20	タイラギ調査 柳川市(渡邊室長, 塚本技官)	18 ~ 19	磯焼け及び伊勢エビ分布調査 宮崎県(吉村室長)
	12 月	27	浅海域における表在性ベントスの分布調査 加津佐町(輿石室長, 清本節技官)
5	橘湾サンプリング調査 茂木港(早瀬室長, 西内技官)	28	定置水温計の交換作業 野母崎町(森永技官)
<hr/>			
<b>研 修</b>		21 ~ 22	防火管理者資格取得講習会 長崎市(染木庶務課長)
	10 月	27 ~ 29	給与実務事例研究会 福岡市(石山係長)
11 ~ 11/9	サメ類の分類学的研究指導のため短期派遣 マレーシア(矢野室長)	30 ~ 12/1	東京水産大学特別講義 東京都(嶋津所長)
	11 月		12 月
8 ~ 10	衛生管理者受験準備講習会 福岡市(梅澤・川端各係長, 脇田事務官)	5 ~ 6	平成12年度西海ブロック資源管理実践研修会 長崎市
17	平成12年度新CAT/ILL説明会 福岡市(脇田事務官)	7	共済組合九州支部年金説明会 長崎市(木谷海洋部長, 村井海区部長, 豊田事務官)
19 ~ 22	平成12年度第1回研究情報業務高度化担当者研修 つくば市(梅澤係長)	13 ~ 14	平成12年度各省庁カウンセラ - 講習会 那覇市(白鳥庶務室長)
20 ~ 12/26	マダガスカル北西部増養殖振興計画短期専門家派遣(マダガスカル)(佐野技官)		
<hr/>			
<b>来訪者</b>	* 石垣支所		発課 戸澤係長他2名
	10 月	24	施設整備打ち合わせ 中央水研中野水産研究官, 武内技官
* 4	施設見学 三津シーパラダイス 鈴木技術員他3名	* 27 ~ 31	海草藻場評価手法の開発のための現地調査 地質調査所海洋地質部山室研究員他8名
* 4,5	設計コンクール現地調査打ち合わせ 建設省巖管繕設計官, 沖縄総合事務局管繕課 岡部課長補佐他4名		11 月
* 12	サンゴの遺伝子発現解析に関する研究打ち合わせ 農業生物資源研究所番主任研究員他1名	* 7	施設見学 根室市議会 中林議員他2名
* 18	管繕設備設計コンクール実地調査 建設省整備課上村課長補佐他3名	* 17 ~ 29	研修「サンゴ礁域の生態調査手法の修得」東京水産大学坂田実験実習場 益子技官
* 24	衛星リモートセンシングに関する打ち合わせ 農人水産技術会議研究開	27	施設視察 農林水産技術会議事務局

	前田整備班施設係長他 2 名		長他 1 名
29	リモートセンシング打ち合わせ 農 林水産技術会議事務局筑波事務所児 玉データ管理係長	14 * 11	放流効果調査研修 韓国国立水産振 興院西海水産研究所ハン博士 施設見学 新栄町老悠さわやかクラ ブ 46名
* 29 ~ 12/1	共同研究打ち合わせ 東京大学大学 院農学生命科学研究科農学国際専攻 佐野教授他 2 名	* 14 * 18	施設視察 春日井中部地方建設局営 繕部長 4 名 藻場・干潟調査打ち合わせ及び施設 見学 海と渚環境美化推進機構奥本 技術参与
12 月			
4 ~ 8	標本整理等 京都大学中坊教授		
13	事務打ち合わせ 日水研小山庶務係		



有明海に向かう西海区水産研究所漁業調査船「陽光丸」

平成12年の年末から日本一のノリ生産地である有明海で起こったノリ不作問題に関し、水産庁長官を本部長とする「有明海ノリ不作対策本部」(平成13年1月16日発足)の要請に基づき、1月末から2月にかけて有明海に第一次緊急調査として出勤。水産庁研究所としての最終章のページを飾るにふさわしく、連日新聞各紙の紙面やテレビ各局を通して全国の視聴者に水産庁調査船の活躍振りを印象付けた。

なお、現在、有明海ノリ問題に対し、地域の水産研究所としての役割を果たすため所長以下全所をあげて頑張っています。全国の水産研究所の仲間からの温かい激励と支援に心より感謝いたします。

(企画連絡室)

**編集委員**(研究成果広報委員)

酒井保次, 木元克則, 豊田尚徳, 依田真里,  
西内 耕, 坂本達也, 林原 毅, 岡慎一郎,  
竹内 一, 梅澤かがり, 脇田由美

●ニュースに対するご意見・お問い合わせは、情報係までご連絡ください。